

## 白頭山・承德・ハルハ河畔： 偽満州国の文化象徴とその表象

国際日本文化研究センター総合研究大学院大学教授  
稲賀繁美

国際的と国家的若しくは民族的とは車の両輪の如きもので、  
其の一を排し得るものではない。

石井柏亭「美術の戦」1943年、192頁

### 1 白頭山

無名の一市民の撮影した写真から始めよう(fig.1)。裏面には「地上四千米ヨリ見タル白頭山頂上(氷結セル)」と見え、「昭和11年、2月4日撮ス」とある。当時、満洲航空が開設していた奉天(瀋陽)からの遊覧飛行に搭乗した際の撮影と推定される。白頭山は中国語訳では長白山と呼ばれ、10世紀に大噴火したことが知られる。海拔2800メートルを前後する峰々に囲まれた火口は、長径4.4キロ、短径3.55キロを越すカルデラをなし、そこには天池と呼ばれる湖が、青灰色の幻想的な水面を広げている。

この山は朝鮮・韓民族発祥の故地として象徴的な意味を担う。たとえば、1910年の3.1.独立運動で独立宣言を起草した崔南善(1890-1957)。日本敗戦の「光復」後には、親日作家として弾劾されることになる崔だが、かれは1926年に「白頭山観参記」を『東亜日報』に連載し、白頭山を「民族の聖山」として復権させるのに大きく貢献したとされる。日本の「富士山」、台湾の和名「新高山」に匹敵する象徴といつてよい。この山岳の帯を源として、東には図們江(豆満江)、北には第二松花江、そして南には鴨緑江が、雄大な流れを三方に延ばしてゆく。この山岳に水源を発する「満洲の沃野」には、いかなるアジア・イメージの種子が孕まれていたのだろうか。

最初にすこし歴史を遡ろう(fig.2)。長白山のふもと、これら3本の大河の源流の近くに、清王朝は康熙51年(1712)に「定界

碑」を設置した。その後2世紀半を経過した1875年には、日本による李朝への「砲艦外交」の嚆矢とされる江華島事件が勃発する。その翌1876年、清は長白山定界碑に記載の「土門」は「豆満」を意味すると主張し始める。これは、あきらかに日韓修好条約(1876)締結に危機感を抱いた、清朝側の反応の一環であり、具体的には図們江以西を清国の領土として確保するための方策だった。その背景には、北方より南下するロシアとの国境問題が控えていた<sup>i</sup>。すでに1860年の北京条約で、清朝はウスリー川以東、図們江より北の土地(現在の沿海州)をロシアに割譲していた。これにより清は、日本海への唯一の出口を失っていた。南を朝鮮、北をロシアに挟まれるなか、中国は図們江北岸に沿って東の領土を回復し、日本海への通路を確保しようと努める。1886年の珲春議定書により、清朝は国境を図們江河口から15キロの地点まで確保する一方、ロシアに図們江の河口までの中国船の航行権を認めさせた。清朝側の代表は、文人・書家として著名な吳大澂(1835-1902)。現在では、珲春市内と国境東端の防川軍事地区の川沿いの丘陵に、吳の巨大な石像が据えられ、愛国の英雄として、その事蹟が顕彰されている。

### 2 間島問題

こうした経緯からすでに明らかとなり、長白山から東北方向にひろがる宏大な図們江流域地域は、地政学的にきわめて重要な地域であった。その領有権をめぐる一連の国際法問題が、いわゆる「間島問題」である。とりわけ日露戦争後、日本が朝鮮半島に統監府を置く1906年を迎えると、朝鮮系の人々が多く居住するこの地域は、清朝と日本との権益が直接衝突する地帯となった。同年、京都帝国大学教授、内藤湖南が「間島問題ニ関スル調査報告書」を外務省に提出しているが、現地にも、「韓国人民の生命財産保護」の名目で齊藤季次郎中佐率いる工作部隊が派遣され、龍井村に統監府派出所を設けている。この現地潜入工作に直接関与した国際法学者として、のちに京城大学学長となる、篠田治策(1876-1946)が知られる。清国領とも韓国領とも確定で

きず、両者の官憲の利害が錯綜した間島地域の歴史地理的な展望は、その著作『白頭山定界碑』(楽浪書院、1938年)に詳しい(fig.3)。その巻末には付録として「間島問題の回顧」(1930)が収められている<sup>ii</sup>。そこで篠田は、日露戦争後、間島地域にいかなる外交上の問題が発生したのかを厳密に分析する。

まず篠田は、清朝が設定した白頭山定界碑は、分水嶺の位置を見誤っており無効であるとする。その一方、韓国側は「土門」を図們江と同一視する清側の主張を追認する失策を犯したことを指摘する。そのうえで、明治42年(1909)に日本と清朝とのあいだで結ばれた「間島協約」に関しては、篠田は「韓国統治上の禍根」をなすものとして、これへの不同意を公言して憚らない。篠田からみれば、日清協約およびポーツマス条約により当然日本側の既得権益となっていたはずの安奉鉄道(朝鮮の安東と奉天を結ぶ)の敷設権をはじめとする諸条項を清朝側にあらためて認めさせるために、日本外務省は国際法上無意味かつ不意な譲歩をした。間島の領土権を清朝側に譲る、という妥協は、したがって外交上の大きな失策を犯したこととなる、と篠田は結論づける<sup>iii</sup>。

この失策が満洲国建国に先立つ時期に不祥事を引き起こす。周知のとおり、1931年9月18日の満洲事変勃発に続き、1932年3月1日には満洲国建国が宣言される。ところがそれに2ヶ月先立つ昭和6年(1931)7月26日から29日朝までのあいだに、問題の白頭山定界碑が、忽然として消えうせた。篠田は「史蹟を隠滅して、国境を漠然たらしめんと企てた」「没常識漢」への「憤懣」を隠さない<sup>iv</sup>。だが客観的にみれば、「相当の重量ある碑石」を除去するには、たんなる「悪戯」どころか、組織的な部隊派遣が不可欠だったはずである。隠滅を「発見」した当の日本側国境守備隊による自作自演ではないにせよ、一件が守備隊の容認の下になされた「計画的行為」だったことを、篠田は言外に仄めかす。朝鮮総督府は、著者の進言にもかかわらず、失われた碑文の捜査を進めようとはしなかった。この一事からも、背後事情は薄うす推察できよう。張作霖爆死事件(1928.6.4)、満洲事変の引き金とされた、奉天近郊の柳条溝線路爆破事件(1931.9.18)は、いずれも関東軍が敵方の破壊工作を演出し、介入正当化の口実とした事件だっ



fig.1  
稲賀襄旧蔵  
「白頭山頂上(氷結セル)」  
昭和11年(1936年)2月4日

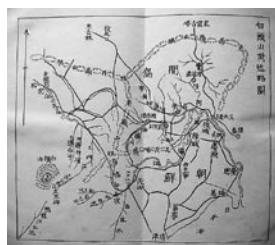


fig.2  
「白頭山附近略図」  
篠田治策著「白頭山定界碑」楽浪書院  
昭和13年(1938年)  
口絵



fig.3  
「消失前の長白山定界碑」  
篠田治策著「白頭山定界碑」楽浪書院  
昭和13年(1938年)

た。その延長上に、日本の熱河占領につづく華北侵入の端緒、盧溝橋での発砲事件(1937.7.7)が位置づけられる。柳条溝事件直前に発生した白頭山定界碑亡失事件も、これらとけって無縁な出来事ではありえない。守備隊自らが碑文消失に呆然自失した、などという証言には、拙劣な彌縫策が露見している。

### 3 熱河作戦

日本軍が熱河省・承德を占領したのは、満洲国成立から2年後の、1933年3月4日。通常、「満蒙」といえば、満洲と蒙古を合わせた呼称と理解されているが、田中克彦も指摘するとおり、厳密には「満洲国に取り込まれたモンゴル地帯」を意味すべき用語である<sup>v</sup>。その南西端、中華民国との国境地帯を占めるのが熱河省であり、その山岳地帯に位置する承德は、満州族出身の清朝の故地、歴代皇帝の避暑山荘の所在地として著名な地域であった。伝統的には、山海関に始まる万里長城の外側すなわち「関外」であり、清朝時代には漢民族の移住は制限されてきた。満洲国成立後の1936年段階で滦河沿いの鉄道は、渤海湾の錦州から承德までようやく開通していた。翌37年には難工事のすえ、万里長城に接する古北口までの延長がなされ、錦古線と呼ばれる。この路線の目的のひとつは、盧溝橋事件を口実に華北に進軍し「関内」の北平(北京)を軍事占領するうえで不可欠な鉄道路線を確保するにあった。満州から北京へと繋がる鉄道は、海岸沿いを山海関から塘沽を経由して天津に入る東側の迂回路か、内陸の古北口から直下する線のふたつしか存在しない。さらに満洲族の故地・熱河を満洲国の版図に組み入れる熱河作戦は、満洲国経済の大きな基盤をなす罌粟栽培を独占支配し、阿片の交易と運送を円滑化するためにも不可分だった。

熱河の淵源をなす承德には、清朝皇帝の壮大な山荘を囲むように外八廟が造営されていた。なかでも山荘背後の丘の斜面には、チベットはラサのポタラ宮殿を模したラマ廟、普陀宗乘之廟が偉容を誇っており、この史蹟には、考古学者の関野貞を団長とする調査団が建築の実測のために乗り込み、遺蹟保存を訴えた

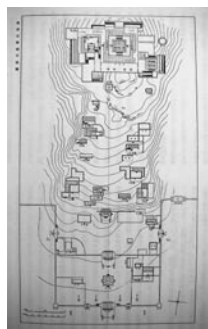


fig.4  
「普陀宗乘之廟」(実測図)  
関野貞・竹島卓一共編『熱河』  
座右宝刊行会、1934年

(fig.4) vi。満洲映画会社も『秘境熱河』と題するドキュメンタリー映画を撮影している。占領直後の33年10月には大阪朝日新聞が着色写真版で『熱河探検画報』(fig.5)を付録として配布し、この後、有名画家たちが、招かれてあいつぎ承德を訪問するようになる。

この秘境に取材した早い例としては、日本軍占領後の1934年に早くも現地入りした川島理一郎(1886-1971)の《承德大観(4-23)》(1934) vii がしられる。川島は現地の風光に触れて「承德の夏はとて甚だしい暑さ」で華氏120度に達する「灼熱の太陽の下で仕事をする困難は、一寸内地では想像も及ばないが、その代りに光線はあくまでも強く、物の形がはっきり見えることは全く素晴らしい」と述べる。「強烈な日光の下でこれらの建築が或ひは金色を輝かせ、或ひは勾欄の朱を映えさせてゐるところ、画家の色彩感には十分に満足せしめられる」。湿潤な日本内地の気候とは異質な、澄んだ大気と透明な日光、堅固な輪郭と濃厚な色彩が画家を魅了した様子が分かる。

そこには箱庭のような島国には存在しない広大な庭園と、欧州の石造記念物に見劣りしない規模を誇る記念建造物、日本の木造建築とは骨格の桁が違った風物が、画家たちを待ち受けていた。川島は「丸ビルの二倍位もある」、普陀宗乘之廟の「スケールの雄大さ」に驚き、普寧寺の「高さ七丈余、木造では世界一の千手観音にも言及する。「規模の雄大なところは如何にも大國の仕事」であり「所々燦然たる当時の面影を偲ばせてゐる」様は「百五十年の星霜にサビをつけて」おり「日光の絢爛さも及ばない」。「むしろローマやボンペイを思はせられる大きさが遺つてゐる」。

清朝皇帝の歴史遺産は、日本には類例をみない巨大な廃墟、古の文化的栄光を今に伝える遺構として画家の目に映じた。崇高の美学を実現するための、またとない遺蹟に直面する機会が、探検者の光栄と、征服者ならではの虚栄心をも擲る。川島は「承德の美が宝の持腐れの状態から解放されんことを祈」り、険峻な未開地を切り拓いてなされる「建設」の様に「実際を見たものでなければ到底想像もつかぬ」偉業を見て「この日本の「新しき土」に



fig.5  
『熱河探検画報』  
大阪朝日新聞附録  
承德行宮視察調査団  
1933年10月5日刊

対する献身的な気持ち」に打たれた」と告白する。その一方、離宮内部の青銅の祠の部材を目当てに毎晩のように盗人が生命の危険を犯して侵入する事実が驚嘆する。さらに周囲一面の「罌粟の花盛りの素晴らしさ」に驚かされ、自らも「阿片」の花園に迷い込んで魅了され「人生的な果敢ない」感興に打たれている。川島は「如何にも満洲らしい雄大な感じと、承德の八大伽藍の眺め」は、旅程の困難や気候の峻烈さを差し引いても、「むしろ積極的に画家に呼びかけ」たい内容を持っていると断言する。

この誘いに応じるように、「訪日宣詔記念美術展」に際して新京(現・長春)に招聘された安井曾太郎(1888-1955)が、鉄道開通直後に現地入りする。その《承德 喇嘛廟(4-19)》(1937-8)が、梅原龍三郎(1888-1986)の《紫禁城》《長安街(4-22)》《北京秋天》《天壇》などの北京風景の連作と並んで、戦前期の日本での油絵のひとつの頂点をなすことは、否定しがたい。後統例には岡田謙三(1902-1982)の《ラマ寺(4-31)》(1941)ほか知られる。ここには極東の辺境の島国の民が、東亜大陸文化の精髓に接して抱いた高揚感、そしてそれとは裏腹の、東洋の覇者あるいは王者たる自負が、絵画制作を通じて具現される。とりわけそこには、油彩という外来の技法を駆使しつつ達成された、東方趣味絵画、いわゆる植民地主義絵画アジア版の、一完成形態を見ることも許されようか。

### 4 駱駝と五族協和

同じ1937年には、安井や梅原とも同郷の、京都西陣の山鹿清華(1885-1981)も《熱河壁掛》(fig.6)を制作し、パリの万国装飾美術工藝博覧会に出品している viii。続く《手織錦壁掛清晏舫》(1938)も北京・北海公園の宮廷にある石造りの船を象った亭に取材したもので、山鹿の中国文明への思慕が如実に感じられる。承德や北京を題材としたこれら一群の作品が、時局の展開と平仄を合わせ、国威発揚の一環をなしていたことは、看過できまい。そこには東亜建設者を自認する日本の優越感が表明されているばかりではない。それにくわえて東洋の精髓である中華文明を、い



fig.6  
山鹿清華《熱河壁掛》手織錦  
284 × 280cm、1937年  
東京藝術大学  
〔「山鹿清華展」京都市美術館、1985〕

まや漢民族や満洲民族に代行して日本人が表象する。この荣誉を担いえた晴れがまし、自らの歴史的使命を誇る自負心すらも、これらの作品からは銜いなく発散されている。吉田博の多色摺り木版画による奉天風景連作にも共通することだが、そこには極力平穏な風物が選ばれ、過去の栄光ある歴史への敬意が、時に現代の衰退や凋落への憐憫を交えた眼差しと対比される。表向きは軍事力による占領であることを漏らさない穏当な、あるいは周到な舞台演出。それが、意図的な隠蔽なのか、それとも軍事機密に抵触することを忌避した消極策なのかは、なお即断を許すまい。

山鹿の《熱河壁掛》の前景には、親子の駱駝が堂々たる姿をみせる。これも当時の「王道楽土」満洲国の図像表象の定型のひとつをなす。同じ京都で陶彫を唱えた沼田一雅(1873-1954)と、その弟子筋にあたる船津栄治(1911-1984)には《胡砂の旅》(1937)(fig.7)が知られる。これらの駱駝置物の時局性にも疑いの余地はない。さらに注目すべきは、川端龍子の《源義経》(1938)(fig.8)だろう。義経は平泉を脱出して大陸にわたり、テムジンとチンギス칸になったとする奇説は、伊藤博文を岳父とする末松謙澄(1855-1920)から小矢部全一郎にいたる論者が、内外でまことしやかに説いていた。末松は日露戦争下、ボーツマス条約に至るまで、英国を中心に日本の立場を欧州に説得するための工作に奔走した外交官。他方、小矢部は『満洲と源九郎義経』を1933年に刊行している。満洲国の成立を受けて、『成吉思汗ハ源義経也』(1924)以来の持論を繰り返した代物だが、江戸時代の偽書に依拠しながら、あやしげな自然人類学的相貌比較論を展開する論旨は、およそ論証の体をなしていないix。だが義経伝説は、日本人の大陸雄飛への夢を正当化するうえで、神話的效果を発揮した。小早川秋声の文展出品作《大地は招く》(1940)の鞍をつけた白亜の駱駝、あるいは半円形の虹の下に二頭の駱駝を配した、柴田儀蔵の《曙の光の刺繍壁掛》(1940)など。そこには、駱駝が同時代に担っていた、大陸雄飛と沙漠への漠然とした憧れとが込められていたx。

さて、冒頭に白頭山上空の遊覧飛行のことを語った。画家としてこの経験を記録したひとりが、ほかならぬ川端龍子だった。1937

年8月3日付け東京日日新聞には連載企画「満洲・熱河」で天池上空を周回した体験が、絵と文で残されている。そしてこれに続く時期、龍子は「大陸策」連作として、4つの屏風仕立ての大作を制作する。まず万里長城に取材した《朝陽拜》(1937)、ついで上に触れた《源義経》。さらに《香炉峰》(1939)、最後が《花摘雲》(1940)。第3作の《香炉峰》は、陸軍囑託として江西省・南昌で戦闘機に座上し、蘆山を上空から眺めた体験に基づくxi。透明に透けた戦闘機の骨組みが特異だが、第4作の《花摘雲》は、その半透明の飛行機が風の精へと置き換わったかの趣向で、蒙古の草原を吹き渡る春風を、天女に託して寓意的に描いている。

寓意的な人体表象は、西欧の絵画アカデミーでは定型だったが、日本では敬遠されてきた表現といってよい。例外的な作品は、多くが公共建築の装飾として準備されたものだった。本論の主旨に関連する作例を列举すれば、和田三造(1883-1967)の《朝鮮総督府壁画・羽衣(2-02)》(下絵)(1921-24)を皮切りとして、大木豊平《新興満洲》(1934)が、皇帝溥儀ではなく、ふたりの童子を引き連れた女性の寓意によって満洲国を描いている。岡田三郎助(1869-1939)は、新京(旧・奉天、現在の長春)の満洲国・國務院の依頼により《民族協和》(fig.9)を描いた。5名の女性によって、漢、満、蒙、朝、日の5民族を寓意しており、人口に膾炙した。こうした寓意表現のきわめつきが、和田三造による《興亜曼荼羅》(1940)(fig.10)だろうか。西原大輔も観察するように、画面周辺にはバリ、インド、タイ、チベット、マイクロネシア、マレー、モンゴル、朝鮮、中国などの風俗を逐一確認できるが、その中央に亭立する台座のうえには、なぜか有翼の天使が御す白馬に引かれた馬車が見える。ここにはギリシア神話の太陽神アポロンと旭日の帝国の象徴とが不思議な化合を遂げており、日本の育んだ王道楽土の夢が、西欧的寓意の焼き直しだった様も露呈しているxii。

## 5 ハルハ河畔

ここで第3に、日中戦争勃発後の満洲国の西北国境地帯、外蒙古に視点を転じてみたい。

満洲国西北端のハルハ河畔は、モンゴル人民共和国の外縁と接する地域だが、両者の国境については合意が成立しないまま、小競り合いの武力衝突が頻発していた。そもそも外蒙古の西側がモンゴル人民共和国としてソ連の衛星国家となり、東半分が満洲国という日本の傀儡国家の領土に取り込まれた、という事情があった。コミンテルン側は、田中義一首相に帰される偽文書「田中メモランダム」(1929)を根拠に、日本の組織的な軍事侵略を想定していたのに対し、日本側は、関東軍の辻政信中佐の冒険主義的な専横を統御できないまま、前線での既成事実を黙認するうちに深みにはまった、とするのが今日の支配的見解だろう。こうして1939年5月11日に勃発したのが、「ノモンハン事件」である。日本側には2万人に達するであろう戦死者を出したこの戦闘に関する絵画作品といえば、藤田嗣治の制作した《哈爾哈河畔の戦闘》(1941)(fig.11)が著名だろう。

藤田嗣治は、洋行以前に初期の佳作《朝鮮風景(4-15)》(1913)を残しているが、その後、第一次大戦中を含み、長らく欧州に滞在した。南米経由で帰国して二科会に招かれた彼は、1935年には北平すなわち北京で《北平の力士(6-03)》(1935)を描いている。取材は前年の34年冬とされる。翌1935年4月から藤田は再度、遼東半島・関東州の租借地、大連を経由して満洲を訪れる。4月23日『満洲日報』には、写真入で、藤田、石井柏亭に田口掬汀の3名の大連入りを告げる記事が掲載されている(fig.12)。おそらくはその折の撮影と推定される顔写真をひとつ紹介しておこう(fig.13)。当時、大連第2中学校教頭だった、稲賀襄旧蔵遺品中の撮影とだが、万年筆により、藤田の直筆で署名がなされている。藤田の紀行「満洲国 絵の旅」は『中央公論』8月号に掲載されているxiii。

現在、東京国立近代美術館に無期限貸与で寄託されている《哈爾哈河畔の戦闘》は、抜けるような青空のもとに蒙古の大草原がパノラマをなして広がり、そのなかで日本兵がソ連の戦車を捕獲する、敗北とは無縁の光景を中心に据えているxiv。もともと本作品は、作戦失敗の責任を負って予備役に編入された荻洲立兵・陸軍中將からの個人的依頼により制作されたもので、軍による



fig.7  
沼田一雅《胡砂の旅》  
1937年  
〔『京都の工芸[1910-1940]』(松原龍一他編)  
京都国立近代美術館、1998〕

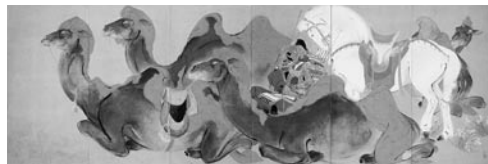


fig.8  
川端龍子《源義経》1938年  
紙本着色・額 六枚二面 243.0 × 728.0cm  
大田区立龍子記念館  
『誕生百二十年川端龍子展』(滋賀県立近代美術館、2006年)



fig.9  
岡田三郎助《民族協和》  
満洲国國務院大ホール壁画  
1936年  
武藤富雄『私と満洲国』文藝春秋、1988、口絵



fig.10  
和田三造《興亜曼荼羅》  
1940年 画布・油彩 80.8 × 116.2cm  
東京国立近代美術館  
〔『戦争と美術1937-1945』2007年 図書刊行会 p.107〕

正式の委嘱画ではなかった。追ってノモンハン戦没者が靖国神社に合祀されるにおよび、陸軍に献納されて「作戦記録画」として遇されるようになった、という。だがすでに広く知られるとおり、この公式作品の裏には、いまひとつの隠されたネガをなす《哈爾哈河畔の戦闘》があった。

7月2日から翌日にかけて、関東軍は工兵隊のかけた、わずか一本の仮設浮橋を利用して、ハルハ河の西岸に侵入し、バヤンツァガン山を占領した。総計1万を超える兵力だったと推定され、100門の砲、60門の対戦車砲が、一旦分解のうえ、対岸で再度組み立てられたという。だが、150台の戦車を投入したソ連側の圧倒的な機化工部隊に対してはなす術もなく、日本側は膨大な犠牲者を草原に残して壊滅した。7月4日から5日にかけて、「何千という死体、死馬の山、無数の砲、自動車」を遺棄したまま関東軍はハルハ河の東岸に撤退し、その退却の渡河の途上でも多くの兵士が溺死したという<sup>xv</sup>。追って8月20日からは、ソ連側は戦車と航空機を展開して、ハルハ河右岸に反撃攻勢を展開する。日本側は地雷を棒に括りつけてキャタピラの下に差し込み、あるいは火炎瓶を投げ、最後には抜刀して戦車に突入するなど、捨て身で対処する惨状となったことが証言されている。日本側守備隊の頑強かつ徹底した抵抗は、9月16日の停戦協定まで続いた。

藤田の手になるもう一枚の《哈爾哈河畔の戦闘》とは、この隠された大敗北の惨状を仮借なく描いたもの、と伝えられている。塹壕から突撃する日本兵の阿鼻叫喚、累々たる死体を踏み潰して前進するソ連戦車。その凄惨きわまりない光景については、複数の証言が残る<sup>xvi</sup>。だがこの禁じられた表象は、一度として公開されることなく、注文主のもとに秘蔵されていたという。現在、その所在は不明であり、専門家たちからは、もはや現存しないものと推測されている。

## 6 越境する逃亡者たちの群像

ここまで満洲国東北端の間島省、南端の熱河省と、万里長城を超えた南に位置する北京、さらに西北端のハルハ河畔を中心

に、地政学的位置と歴史的背景を踏まえ、編年に沿って概観してきた。間島問題から熱河作戦、さらにノモンハン戦争に限定し、日本が擬制として建設した「満洲国」の辺境地帯、国境紛争を手がかりに、近代の東アジア・イメージをめぐる政治学の一斑を考察することに目的があった。「五族協和」に謳われた五つの民族のうち、韓＝朝鮮族、満洲族と漢族、それに蒙古族と日本統治との関係が、それぞれの場面で写真や絵画による表象の背後に横たわっていることが見てきた。ここで振り出しの間島地域にもどり、全体の締めくくりに移りたい。

いくつか事蹟を拾っておこう。満洲国独立宣言当日の1932年3月1日には、日本で牧村浩が「間島バルチザンの歌」(1932)を発表し、ほどなく検挙される。牧村は現地体験こそなかったが、間島は抗日バルチザン運動の拠点となっており、41年に至るまでのゲリラ活動で金日成が頭角を現したこともよく知られる。同1932年には雑誌『改造』主幹、山本實彦も龍井ほかを訪ねている(『満鮮』1932年)。同地区には日本からも共産党を含む工作員が多々潜入しているが、これに続く時期には「民生団事件」(1932-5)のように、中国共産党が反共スパイとして朝鮮人活動家を多数粛清する事件も発生する。当時、間島に日本からも熱い視線が注がれていた様子は、35年に現地を訪れた大宅壮一の「炎は流れる」(『間島ソビエト探訪記』全集26巻)からも窺える。その一方、今西錦司を隊長とする京都帝国大学白頭山遠征隊は1935年1月、冬季初登頂に成功する(『遠征隊報告』1935)。これに刺激を受けた梅棹忠夫らの第三高等学校山岳部隊が1940年夏に白頭山に登頂し、第二松花江の源流を初めて確認している(『梅棹忠夫全集』第1巻) <sup>xvii</sup>。

龍井を中心とする北辺・間島の国境地帯は教育程度も高かった。篠田治策に言わせれば、それは一方では日本側の「模範的」文教政策の施行ゆえだが、同時に間島は「排日思想を有する不逞の徒の逃避地」でもあった、ということになる <sup>xviii</sup>。篠田はその例として李相高(1870-1917)に触れる。李は、1907年のハーグにおける第2回国際平和会議に、大韓帝国の使節が高宗の密書を携えて現れた「ハーグ密使事件」の首謀者だが、彼は龍井に私塾、

瑞典義塾を開き、愛国教育に従事していた。こうした知的背景をもつ龍井の光明学園中学部からは、1938年には、詩人として高名な尹東柱(1917-1945)が卒業し、京城の延禧専門学校(現・延世大学)に入学する。詩人はやがて日本留学し、京都の同志社大学在学中、治安維持法違反で検挙され、1945年に福岡刑務所で獄死する。龍井第4中学校構内には、李相高記念館とともに、尹東柱の記念碑が建てられている。

同じ1938年6月13日、ソ連の極東地方長官リュシコフ少将が珲春東方の「鮮満国境」から越境し、ソ連赤軍内部で開始された大粛清の情報を提供した。大物の亡命はマスコミを賑わしたが、これに続いて発生したのが、冒頭に触れた防川地域でのソ連軍と日本軍との武力衝突、日本側のいう張鼓峰事件、ソ連側のいうハサン湖事件(1938.7.11-8.10)である。これにより豆満江は日本側が河口を機雷封鎖したため、船舶の航行は不能となる。これが翌年のノモンハン事件とともに、満洲国の東北端と西端とで発生した一対の国境紛争だったことは、あまりにも明白だろう。間島問題が「朝鮮族」居住民の權益保護を名目とした大国の領有権主張に端を発したならば、ノモンハンの場合には国境によって分断された「蒙古族」の掌握を目指す日ソの対立が背景をなす。そこに日本に併合された大韓帝国に加えて、満洲国、モンゴル人民共和国という傀儡政権の命運が絡まり、敵方への内通者やスパイ容疑者の摘発、拷問による自白の強要、偽造文書による罪状確定、反逆罪による処刑・粛清などの謀略と恐怖政治が渦巻いた。リュシコフ亡命から2ヶ月後の38年8月には、今度はモンゴル人民共和国からピンバー(あるいはビャンバ)大尉が満洲側に逃避している。その記録は『外蒙古脱出記』(1939)として出版され、当時おおきな話題となった。だが、この貴重な情報源、ピンバーは、ノモンハン事件停戦直前に、前線であっけなく「戦死」を遂げる <sup>xix</sup>。

## 7 北辺の国境へ

こうした知識を背景として、あらためて石井柏亭(1882-1958)の《西部蘇滿国境》(1943)を見ると、どうだろう。そこに描かれ



fig.11  
藤田嗣治《哈爾哈河畔の戦闘》  
1941年 画布・油彩 140.0 × 448.0cm 第二回聖戦美術展 陸軍作戦記録画  
東京国立近代美術館(無期限貸与作品)



fig.12  
4月23日『満洲日報』  
藤田、石井柏亭に山口掬汀の3名の大連入りを告げる記事が掲載。



fig.13  
藤田嗣治 肖像  
(稲賀襄田蔵 1935年4月 関東洲・大連にて撮影、と推定)

た国境は、いまや別の相貌をもって迫ってくるのではなからうか。かつて藤島武二(1867-1943)は台湾の最高峰・玉山に取材した《旭光 新高山(4-08)》(1935)や、内満蒙のドロンノールに足を伸ばし、水平線の砂漠の「神韻縹渺」たる日の出の下を進む駱駝のキャラヴァンを描いた《旭日照六合》(1937) (fig.14)を制作したxx。「光芒一箭、陸離たる旭日」に「国威の象徴」を謳いあげた藤島の浪漫性・寓意性は、石井の《西部蘇滿国境》には皆無である。本稿冒頭に触れた、観光写真よろしき白頭山の航空写真(1937)が、藤島と石井との、どちらの側に属するかは明らかだろう。そこには藤島の山岳風景に通ずる祝祭性がなお健在だった。だが上空から鳥瞰した壮麗なる風光が、地上ではいかなる地政学的・軍事的な軋轢を密かに孕んでいたのか。その落差を、部分的にはあれ、再構成することが、本稿のひとつの眼目であった。満洲国のソ連との国境線のその後を問うことは、もはや「東アジアイメージ」「日本近代美術はどうアジアを描いてきたか」という企画の臨界を越える話題となる。ソ連軍の侵攻、シベリア抑留につながる絵画的経験については、今まで多くが語られ、多くの作品が残されてきた。北辺の国境を跨ぐ収容所体験、内地帰還や残留孤児の美術表象は、また改めて考察せねばならないxxi。

2009年8月14日稿, 同9月18日校了。

- i ちなみに、なぜ中国や韓国が江華島事件をもって「日帝による大陸侵略の起点」と解釈するのかは、日本ではなかなか理解されない。だが日本海軍による漢江河口部測量を名目とした領海侵犯事件は、すぐさま韓国境の間島領有問題にも飛び火したことが、ここに見える。江華島事件は、すでに間島への日帝の領土的野心の一環、即ち中国東北侵略の起点と解釈される土壌があったわけだ。
- ii 篠田治策『白頭山定界碑』楽浪書院、1938年。その巻末には付録として「間島問題の回顧」(1930)が収められている。内地で刊行された冊子では数箇所伏字が残っている。1930年に大連で発刊された冊子が、滋賀県立大学図書館・朴文庫の所蔵されており、これには伏字はない。比較す

- ると、篠田が外務省担当者の無責任な口約束を引用した部分2箇所が、不適切として検閲されたらしいことが判明する。
- iii ちなみに、白頭山周辺の北朝鮮と中国との国境画定は1990年にまでもちこされた。さらに間島協約は今年2009年9月4日で百周年を迎える。100年間異議申し立てがない場合、間島の中国領有が永久化する。そのことへの懸念から、北米在住の在野韓国人史学者、ポール・キムから、間島の領土権を日本が擲棄したことを無効として、韓国政府は国際司法裁判所に提訴せよ、との嘆願がなされている(『朝鮮日報』2009年8月13日付)。そこで韓国領有権の根拠とされたのは、ほかならぬ篠田の著作に記録のみえる「間島は韓国の領土である」(前掲316頁)との、龍井憲兵隊分遣所長会議での訓示だった。
- iv 篠田前掲書。自序、2-3頁。なお大韓民国では近年本書翻訳(止善堂、2005年)が出版されている。
- v 田中克彦『ノモンハン戦争』岩波新書、2009年、75頁。
- vi 「普陀宗乘之廟平面図」、関野貞・竹島卓共編『熱河』座右宝刊行会、1934年。この調査については、徐蘇斌『東洋建築史学の成立に見るアカデミーとナショナリズム』『日本研究』26号、2004年、122-124頁。以下の註に記した川島理一郎の紀行にも、熱河遺構保存計画への言及がみられる。
- vii 『川島理一郎画集』日動画廊、1973年巻末年譜。川島にはこの時期の著作として『旅人の眼』1936年、『緑の時代』1936年および『北支と南支の貌』1940年いずれも龍星閣があり、『緑の時代』には「承德の景観」「熱河ところどころ」が収められている(以下引用は99-112頁)。軍の嘱託(少将待遇)で3度大陸に渡航した著者の行程は、鉄道開墾工事の現場や交通状況を今に伝えて貴重である。
- viii 『近代染織の創始者 山鹿清華展』京都市美術館(原田平作・編)、朝日新聞社、1985年。
- ix 橋本順光「義経=ジンギスカン説と黄禍論」一柳廣孝、吉田司雄(編)『女は変身する ナイトメア叢書6』、青弓社、2008年。なおコミンテルンによるモンゴル民族主義弾圧は黄禍論の変奏である。
- x 千葉慶「不安と幻想:官展における〈満洲〉表象の政治的意味」『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』vol.175、2008年、p.18-53。近年の学術業績は本論文の文献表に譲る。
- xi 岡部昌幸「再評価すべきは川端龍子」『川端龍子展』滋賀県立近代美術館ほか、2006年、156頁。

- xii 西原大輔「近代日本絵画アジア表象」『日本研究』第26集、角川書店、2002年、208-209頁。
- xiii なお『〈満洲美術〉年表』(私家版、1998年)をはじめとする、飯野正仁の業績も参照されたい。
- xiv 本図については、針生一郎ほか編『戦争と美術 1937-1945』国書刊行、2007年、金子牧による解説、205頁。金子は本図を関東軍第23師団がハルハ河とホルステン河の合流点付近で、ソ連第11戦車旅団に対して行った包囲殲滅作戦の光景と推測している。より詳細な学術的報告が期待される。
- xv ジューコフ『ジューコフ元帥回想録』、清川勇吉他訳、朝日新聞社 1970年、123頁。
- xvi 田中穰『藤田嗣治』新潮社、1969、194-196頁。近藤史人『藤田嗣治「異邦人」の生涯』講談社、2002、193-195頁。ときに作品の喪失は、喪失した作品以上に雄弁に、時代と社会環境を物語る。
- xvii このあたりの情報について、「間島歴史年表」<http://yb/gnl.ccl>に充実した信頼性高いサイトがある。
- xviii 篠田 前掲『白頭山定界碑』271、318頁。
- xix 田中克彦前掲書、第7章。田中同書巻末に、モンゴル語他を含む関連文献書誌がみられる。
- xx 『没後40周年記念 藤島武二展』目録、三重県立美術館、1983年、東俊郎編の年譜を参照。藤島の本作については丹尾安典・河田明久『岩波近代日本の美術1 イメージのなかの戦争』岩波書店、1996年、43頁。藤島の引用句は、藤島武二『満洲の日の出』『塔影』1937年9月号より。
- xxi 関連図書は枚挙にいとまないが、一般向きの著作として刊行当時反響を呼んだものに、高野悦子『黒竜江への旅』新潮社、1986、岩波現代文庫、2009。またシベリア抑留画集出版委員会『きらめく北斗星の下に』1989ほか。さらに文学作品として、石原吉郎『望郷と海』(1972、現在絶版)は逸しがたい。



fig.14  
藤島武二《旭日照六合》  
1937年 画布・油彩 71.0 × 98.3cm  
宮内庁三の丸尚蔵館  
〔『戦争と美術1937-1945』2007年 国書刊行会p.115〕